

今もこんこんと清水が湧き出し、

数々の伝説が残る宿場町

中山道61番目の宿場「醒井宿」は、古くから名水の地として知られていて、

日本遺産「琵琶湖とその水辺景観」祈りと暮らしの水遺産」の構成文化財にもなっている。

米原市生涯学習課の小野航さんの案内で、職場体験中(市役所の業務)の

米原市立米原中学校の生徒5人と一緒に宿場町を歩いた。

旧醒井郵便局から 旧醒井宿問屋場へ

JR東海道本線醒ヶ井駅を下車。国道21号を渡り、すぐに左折して100メートルほど進むと、2階建ての洋風建築物が見えてくる。ヴォーリズが設計に携わった「旧醒井郵便局」で、のちに訪れる「旧問屋場」とともに「醒井宿資料館」として活用されている。



大正4(1915)年に建てられ、昭和48(1973)年まで「醒井郵便局」として使われていた擬洋風建築物。昭和9(1934)年に外壁をモルタル張りに改築するなどの改修が行われた。国登録有形文化財

宿場関連の資料を展示する2階には、醒井宿の庄屋などを務めていた江籠宗左衛門家に伝わる古文書などが並ぶ。なかでも長さ5メートル30センチにおよぶ、享和4(1804)年の「醒井宿絵図」は見ものだ。

「醒井宿の成立時期は不確定ですが、古代からの交通の要衝であり、中世にはすでに宿場機能を有していたと考えられています。湧き水が豊富で、多くの旅人がこの地で喉の渇きを癒やしました。大きな宿場町ではありませんが、物資や人が行き交い、にぎわっていたようです」と、小野さん



問屋場(といやば)とは、宿場を通行する諸大名や役人に人足や馬の提供、荷物の積み替えなどの引継ぎ事務を行っていた所。「醒井宿資料館」として公開されている。この旧問屋場は1700年代初期(江戸時代前期)の建築で、完全な形で現存する問屋場は全国的にも珍しく、米原市の文化財に指定されている

「醒井宿の成立時期は不確定ですが、古代からの交通の要衝であり、中世にはすでに宿場機能を有していたと考えられています。湧き水が豊富で、多くの旅人がこの地で喉の渇きを癒やしました。大きな宿場町ではありませんが、物資や人が行き交い、にぎわっていたようです」と、小野さん

「醒井宿の成立時期は不確定ですが、古代からの交通の要衝であり、中世にはすでに宿場機能を有していたと考えられています。湧き水が豊富で、多くの旅人がこの地で喉の渇きを癒やしました。大きな宿場町ではありませんが、物資や人が行き交い、にぎわっていたようです」と、小野さん

が醒井宿の概要などを説明してくれました。

次に向かったのは、「木曾路名所図会」に記された醒井の名所「三水四石」の、三水のひとつ「西行水」。街道を少し東へ行くと、もうひとつの三水「十王水」がある。地蔵川の清らかな流れに沿って、さらに東へ。その途中、川の各所

醒ヶ井駅周辺にある名水&梅花藻を紹介!

居醒(いさめ)の清水

ヤマトケルが伊吹山の荒ぶる神との戦いで傷つき、毒によって意識がもうろうとしながら山を下り、今の醒井にたどり着いて、湧き水を見つける。その水で喉を潤すと、たちまち正気を取り戻した。そこから「居醒の清水」と名付けられ、醒井の地名の由来ともいわれている。鈴鹿山系霊仙山の伏流水と考えられていて、1日1.5万トンの湧水量を誇る



十王水

天台宗の高僧・浄蔵法師が諸国遍歴の途中、同じく天台宗の高僧・仲算がこの地で湧き水を祈り出したことを聞き、自らも岩盤の下をくぼめて水源を開いたという。「浄蔵水」と称すべきところ、近くに十王堂があったことから「十王水」と呼ばれるようになった。と伝わる。水源は私有地内のため見られないが、川中に「十王」と彫った灯籠が立つ



西行水

仲算が短剣を取り出して印を結び、呪文を唱えて岩の端を切ると、清水がほとばしり出たという伝承が残る湧き水。茶屋の娘が西行の飲み残した茶の泡を飲んだところ懐妊し、男の子を産んだ。これを聞いた西行が「本当に我が子なら泡に戻れ」と唱えると、たちまち泡になって消えた。西行は供養塔を建て「西行水」と呼ばれるようになったという



梅花藻(ばいかも)

梅花藻はキンポウゲ科の水の中花で、梅に似た五弁の白い小さな花をつけることから、この名がつく。水温が年間14度前後の清流にしか育たない。7月下旬から8月下旬にかけて見頃を迎え、地蔵川の随所で咲き誇る。例年、夜間ライトアップが行われ、涼やかな地蔵川のせせらぎと、暗闇に浮かぶ梅花藻の可憐で幻想的な光景が、心を癒やしてくれる



に設けられた石段に気付く。

小野さんによれば、「川端」と呼ばれる、住民が洗い物などをした場で、左岸の川端は街道筋の南側の家、右岸の川端は北側の家のものという。咲き始めた「梅花藻」の花を愛でつつ歩を進めると、右手に旧問屋場が現れた。

地蔵堂を経て 加茂神社に至る

旧問屋場の広い土間に入り、初夏の陽射しから逃れて、ひと息。「ひとつの宿場に問屋は1、2軒が一般的ですが、醒井宿には7軒ありました。物資の輸送が盛んだったという一面はあるものの、業務は多忙で負担も多く、経営も決して楽ではなかったため、複数の間屋が交替で業務を担っていた

と「思われます」と小野さん。街道をさらに東へ向かう。右手に見えてきたのが「地蔵堂」。弘仁8(817)年の大干ばつの際、伝教大師(最澄)が醒井で降雨を祈願して彫ったと伝わる地蔵菩薩を安置している。当初は地蔵川のなかに置かれていたため、「尻冷やし地蔵」と呼ばれていたそう。毎年8月23日、24日には盛大な「地蔵盆」が行われる。地蔵堂を過ぎると、右手に大きな石鳥居。「加茂神社」である。その先が宿場の東端で、見附跡と道が左右に直角に折れ曲がる折形が見られた。

加茂神社は石垣の上に鎮座している。急勾配の石段が本殿へ続く。岩盤の下から湧き出ているのが三水の最後「居醒の清水」で、環境



米原市役所業務の職場体験で、今回一緒に宿場を散策した米原中学校2年生の5人。「湧き水がきれいで冷たかった」「ヤマトケルの話など、たくさんの伝説があつて興味深かった」などの感想が聞かれた

上)天保14(1843)年の「中山道宿村大帳帳」によれば、醒井宿の家数は138軒、うち本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠11軒で、人口は539人である。宿長も8町2間(約876メートル)と短い。下)加茂神社の創祀は定かでない。江籠宗左衛門の別雷神命(わけいかづちのみこと)の名から「別雷皇宮」とある。現在の地よりも南側に記されているが、名神高速道路の建設に伴って遷った



省の「平成の名水百選」に選ばれている。『古事記』『日本書紀』が語るヤマトケル神話ゆかりの清水とされ、湧水池にはヤマトケルの像が立ち、「三水四石」の四石のうち「腰掛石」「鞍掛石」「蟹石」がある。あとのひとつ「影向石」は、名神高速道路の工事で埋没したそ

自治会長に聞いた 醒井の今

小野さん一行と分かれて、醒井の自治会長を務める江竜謙一さんを訪ねた。江竜さんは醒井宿に店

を構える「醤油屋喜代治商店」の4代目で、伊吹産の大豆、長浜産の小麦、醒井の水を使った濃口醤油「喜代治」を開発するなど、まちの活性化にも努めている。

醒井の夏の風物詩「梅花藻」も、一時絶えてしまっていたのを地元住民の力で復活させたという。近年は年間20万人近くの観光客が見学に訪れるまでになった。

「課題は少子高齢化、若い世代の流出です。今年、醒井地区から小学校に入學したのは、わずかにひとり。年2回の地蔵川の掃除も、高齢者にはきつくなってきました。後継者不足などから、かつて100軒ほどの店が軒を連ねていたのが、今や寂しい状況に」

少しでも活気を取り戻そうと、米原商工会女性部による梅花藻パウダーを使った商品開発や、水辺の環境を整備した癒やしの空間づくりなど、観光客誘致に取り組んでいる。



醒井地区の自治会長の江竜謙一さん。地蔵川での鯉の放流に関する失敗談や、地蔵盆のにぎやかな様子など、いろいろと話してくれた

「梅花藻も間もなく見頃を迎えますので、ぜひ多くの方にお越しただきたいですね」
今夏は、新型コロナウイルス感染症対策を実施しながら、地蔵盆も開催予定。住民による「つくりもの」が飾られ、屋台が並び、フイナレには「万灯流し」の風情ある景色が楽しめる。